

日本学術会議 課題別委員会 フューチャー・アースの推進に関する委員会
持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会（第4回）
議事要旨

1. 日 時：平成28年4月11日（火）14：30～17：00
2. 場 所：国連大学 12階 会議室
3. 出席者：氷見山委員長、中静副委員長、小金澤委員、小松幹事、武内委員、田中委員、田路委員、林委員、日置委員、福士委員、山口委員（11名）
欠席者：花木委員、井田委員、宮寺委員、毛利委員、山形委員（5名）
4. 配付資料： 資料1： フューチャー・アースの推進に関する委員会持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会（第3回）議事要旨案
資料2： 提言「持続可能な地球社会の実現をめざして—Future Earth（フューチャー・アース）の推進」
資料3－1： IYGU の暫定 RAC 発足のご挨拶とお願い
資料3－2： IYGU Regional Action Center for Japan（IYGU RAC-Japan）
資料3－3： 2016 国際 Global Understanding 年資料
資料4－1： 学術大型研究計画「Future Earth:地球人間圏の相互作用環の俯瞰解明に基づく地域からグローバルな持続可能性の追求」（マスタープラン2014掲載）
資料4－2： 5つの課題と3つのセンターの関係
資料4－3： 持続可能性向上のための教育情報ネットワーク
参考1： 分科会委員等名簿

5. 議 事：

（1）前回議事要旨案（資料1）の確認

（2）国連大学の概要紹介

国連大学副学長の武内委員から、国連大学設立の経緯、組織、運営、活動について紹介があった。教育に関連しては、設立当初のミッションとして、国連における学術研究機関の位置づけであったが、現在は、大学院修士課程と博士課程を設置し、25名の大学院学生を教育している。FEに強く関連するサステナビリティ高等研究所が設置されており、SDGs、SATOYAMA、IPBES、等に関するプロジェクト研究を行っている。東京大学との共同学位として修士14名、博士9名が在籍している。各委員から武内委員への主な質問と回答は次の通り。

- ・国連大学における初等教育とのかかわりはあるか。A：ESDでかかわっているが学部、初等教育とはかかわりはない。
- ・国内の大学との関連で、初等教育分野とのかかわりは。A：sustainabilityに限られているのでやっていない。
- ・拠出金の配分はどうなっているのか。A：外務省文化所管のユネスコの任意拠出金が配分されている。
- ・大学院生の進路はどうなっているのか。A：大学院生はアジアとアフリカ出身が多く日本人は少ない。アフリカ出身者は、国連機関への就職の期待が大きい。給与の面からも国際公務員が一番良いことも動機としてある。
- ・国連大学の活動は環境関係が多いのか。A：環境とPeace and Governanceが2つの軸である。前者を武内副学長が、後者を学長が担当している。
- ・ユネスコとの関係はどうなっているのか。A：UNESCOとの関係はESDである。sustainability scienceを提唱している文部科学省の拠出金で、UNESCOの自然、社会の部門と共同で、ESDを含むプロジェクトをしているが、ESDの占める割合は小さい。

（3）フューチャー・アースの動静について（資料2）

氷見山委員長から、3月末に公表された親委員会の提言「持続可能な地球社会の実現をめざして—Future Earth（フューチャー・アース）の推進」について説明があり、意見交換をした。教育

に関する部分は、氷見山委員長と安成 FE 委員会委員長とが協議してまとめたとの報告があり、また地球惑星科学委員会地球人間圏分科会から、地質年代の扱いについて修正意見があったことが紹介された。各委員からの主な発言は次の通り。

- ・「地球システム」の概念には人間が入っているか。
⇒勿論入っている。
- ・提言要旨の最後の①から⑤の優先研究課題は FE の大型研究マスタープラン（3 月 31 日提出）に反映されている。

（4）IYGU（国際地球理解年）について（資料 3-1, 3-2, 3-3）

氷見山委員長から、IYGU について次の説明があった。IYGU は、ICSU（国際科学会議）、ISSC（国際社会科学評議会）、CIPSH（国際哲学生文学会議）により立ち上げられた。イエナにある事務局と広島大学岡橋教授との間で覚書が交わされ、本年 4 月 1 日、IYGU の RAC が広島大学で発足した。この RAC は広大 TAORYAKA Program、IGU 日本委員会、JOGS（地理学連携機構）と密接な関係をもつ。IYGU は国連総会での承認には至らなかったが、UNESCO 総会で承認されている。希望する個人や機関が RAC に登録することで、RAC の Associate として活動できる。IYGU は FE とりわけ教育に関わる活動のボトムアップを担うと考えられる。日本における活動では、10 月初めに Science and Technology in Society Forum (STS) の招待で、STS の年次総会に Werlen 教授が来日し、広島にも行く予定である。

・RESAS（地域経済社会分析システム）は、経済、環境、社会の 3 つの要素についてスケールを変えて見れるソフトである。函館を対象として、人口、企業の納税、などの情報が瞬時にわかる。しかし、日本最大のセメント工場があるが、CO₂収支や自然環境が関連付けられていない。IYGU の活動と関連づけられないだろうか。

・例えば植林活動が単純に CO₂の削減に寄与するとは言えず、逆効果のこともある。環境をよくするための活動が環境に負の影響を及ぼすこともある。IYGU では、場所ごとの状況に応じた専門家の知識を生かすことができないか超学際的に検討する。

・Local と Global の両方のスケールが重要である。旭川の地図展の例では、子供たちは自ら歩いて観察し、環境地図を作ることで GIS、可視化、情報共有などを学び、自分たちの望む社会のビジョンを設計する力も身につけることができる。

・世界全体で IYGU の計画はどうなっているか。

・3 年計画であるが、もう少し長期に活動したいと考えている。Global な活動はトップダウンになりがちだが、local でのボトムアップも大切だと考える。地域の文化、社会の違いを考えるのが重要である。ポルトガルでは、個人と機関が参加して大きなネットワークをつくっている。この機会に日本がリーダーシップをとり、ESD などがクローズアップされるようにしたい。

・IYGU がユネスコ総会で認められていれば、ユネスコスクールで活動ができるのではないかな。今までのプログラムとの関係があるとわかりやすい。

・FE は教育やボトムアップの具体的な行動をまだあまり考えていないのではないかな。IYGU の活動は FE を補完する。

・IYGU の RAC は基本的に UNESCO に提出された IYGU の文書に基づく条件で設置が認められる。

・広島大学の RAC はリーディングプログラムの資金で活動する。

・広島大学の RAC は日本の RAC であり、ネットワークでつながるというコンセプトで活動する。日本、中国、韓国、インドの間で連携する。

・今の子供は、試験は良いが主体性がなく、自らの力がない。中教審では、2020 年までに初等中等教育の教育課程（指導要領）の改訂を行うことになり、各教科の目標と内容を決めるための統一の枠組みを決めた。論点整理の中で、『複雑で変化の激しい社会の中では、固有の組織のこれまでの在り方を前提としてどのように生きるかだけでなく、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力が必要となる。』という記述があり、中教審で議論している。FE に関連しているので、2~3 年かけて FE を中教審の委員に理解してもらえれば、FE は中教審にインパクトを与えることができるのではないかな。

・平成 25 年度より東京工業大学は、文部科学省政府開発援助ユネスコ補助金によりユネスコアジア太平洋教育地域事務所と協同で、アジア・太平洋地域における「21 世紀型スキル」に関する研

究事業を行っている。東工大のリーディングプログラムでは、環境、社会に工学的スキルを入れるという取り組みをしている。今後のために、IYGU の情報も知りたい。

- ・ IYGU Japan RAC の Associate になればメーリングリストで有益な情報が得られる。
- ・ FE のアプローチをリーディングプログラムで各大学に定着させたい。博士課程であるが、蛸壺化されず、民間を含めるというプログラムである。現在、2 年目のプログラムについて中間評価をした。定常的なプログラムに反映されているかが評価される。博士課程学生に FE を取り上げてもらう良いタイミングである。
- ・ 教育コミュニティに FE を取り入れるのには IYGU がよいのではないか。
- ・ IYGU の中で FE との関係がはっきりしていればよい。RAC でも FE とのつながりを強調する必要がある。
- ・ RAC では FE との間に相互リンクを張っており、両者の連携は公的にはっきりしている。
- ・ 学術会議の講堂で、IGU 分科会が中心となって公開講演会を開催する計画がある。
- ・ 前回の分科会で、IYGU の活動に前向きに対応することで合意しており、上のシンポジウムの計画にも前向きに関与することとした。

(5) 前期提言の実践と普及および今後の活動について

氷見山委員長から、3 月末に提出された FE に関する大型研究提案(資料 4-1, 4-2)と、それに向けて本分科会から提出した教育に関する提案(資料 4-3)について説明があり、次のような議論が行われた。

- ・ ネットワークサブ拠点として出せないか。大型研究で出したので、これからの課題は、重点大型研究に認定されること。ヒアリングで多くの人たちに理解してもらうことが必要である。限られた時間で、拠点、サブ拠点でどういうことを担うのか明確にする必要がある。
- ・ ユネスコスクールのネットワークを具体的に出せる。
- ・ 資料 4-3 をもとに整理するので、資料 4-3 の(1)②ユネスコスクールと大学との連携システムの充実と活用、のところの情報を出してほしい。
- ・ 組織がしっかりしていないとできない。今までバラバラである。JST で5年間実施した、環境リーダープログラムのネットワークを取り込むのが有効である。初等中等教育と大学をつなぐところができていないので、その辺を FE でできないか。
- ・ 現在あるリソースを生かす。当面資料 4-3 を付けして安成 FE 委員長に提出する。

(6) 次回分科会について

次回は 2016 年 7 月 8 日(木)10:00-12:00 か 7 月 19 日(火曜日) 14:00-16:00 に、福士委員が在職する東京大学本郷キャンパスの東京大学国際高等研究所サステイナビリティ学連携研究機構で開催予定である。

(7) その他

なし。

以上